

# 日本におけるムラージュ技師の系譜 ゲーテを起点とする近代日独医学交流補遺

石原 あえか

## I. はじめに ゲーテとムラージュ (蠟製標本)

「ムラージュ Moulage」とはフランス語由来の言葉で、鋳型をもとに作られた「蠟製標本」をさす。ドイツ語では文字通り Wachsmoell とも呼ばれるが、患部の病変・欠損・先天性異常などを直接患者から石膏などで型どりしているのが、大きさ・形・構造などは現物と等しく、また彩色もできる限りありのままの症例に近づけられているところが、形容詞「anatomisch」がつく「蠟製解剖標本」と異なる点である。このムラージュは、近代医学、特に近代における皮膚科学の研究と教育に重要な役割を果たしてきたが、今ではすっかり存在が忘れ去られている。

筆者が医学教材としてのムラージュを知ったのは、ゲーテの後期長編小説『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代 *Wilhelm Meisters Wanderjahre*』（決定稿 1829 年）の第 3 巻第 3 章の記述からである。ドイツ教養小説の代表作にも位置づけられる前作『ヴィルヘルム・マイスターの徒弟時代 *Wilhelm Meisters Lehrjahre*』で当初俳優を目指していた主人公は、己の知識や技術を社会に還元できる専門職として外科医志望に転向する。その解剖実習場面で、自殺した若い女性——当時の医学部人体解剖に回されるのは、犯罪者か自殺者に限られていた——の腕を配当された主人公は、その美しさに見惚れ、メスを入れることをためらう。そこに造形芸術家（「彫刻家」とも訳される）の紳士が登場し、主人公をアトリエへと誘うのだが、その奥まった部屋の壁面には、蠟などに彩色を施された解剖模型が飾られていた（MA<sup>1</sup> 17, S.557）。ここで造形芸術家は医者への卵ヴィルヘルムに、蠟製解剖模型の効用や意義について語り、早逝した愛弟子の最後の作品「驚くほど精緻に再現された顔面神経」（*ibid.*, S.559）を見せる。

かつてイエーナ大学医学部で解剖学教授のローダー（Justus Christian Loder, 1753-1832）に解剖学や骨学の手ほどきを受けたことがあり、また同大学監督官として医学部の人事にも深く関わっていたゲーテが作者であることを踏まえ、その背景を調べてみると、案の定、歴史的モデルが存

<sup>1</sup> ゲーテの著作引用は、*Johann Wolfgang Goethe. Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens. Münchner Ausgabe [MA]. Hrsg. v. Karl Richter in Zusammenarbeit mit H. G. Göpfert, N. Miller, G. Sauder und E. Zehm. 20 Bde. in 32 Teilbänden und 1 Registerband. München (Carl Hanser) 1982-1998* による。以下、同全集からの引用は略称 MA とともに、巻数・頁数のみを記す。

在した。この人物についてはすでに拙論で取り上げているので<sup>2</sup>、以下、簡単な紹介な紹介に留める。彼の名はマルテンス (Franz Heinrich Martens, 1778-1805)<sup>3</sup> と言い、1800年にイエーナ大学で医学士 (MD) を取得した後、ライプツィヒで開業した。1804年に同僚の皮膚梅毒科講師ティレジウス (Wilhelm Gottlieb Tilesius, 1769-1857) と共著で、24枚の彩色銅版画つき『性病図譜 *Icones symptomatum veberae morbi*』(1804) を出版した。患部を詳細に模写した銅版原画は、著者でもあるティレジウスおよびマルテンスの両名が手がけた。どれも精緻な図版であるが、性病特有の三次元的な皮膚の凹凸や疾患を二次元で描写することに限界を感じたマルテンスは、蠟を使った標本作成に挑む。これまでの業績を評価され、1804年にイエーナ大学医学部准教授に招聘・着任するが、翌年、27歳で急逝してしまう。ゲーテが買い取った遺品コレクションには、マルテンス自作のムラージュが31点含まれていた<sup>4</sup>。

ゲーテはマルテンスが始めたムラージュ製作の続行を希望したが、いかんせん製作技法はマルテンスが秘匿したまま逝ってしまったので、手掛かりがまったくつかめず、早々に挫折した。けれどもゲーテはムラージュの医学的有用性を忘れることはなかったと見え、最晩年の1832年2月4日付ベルリン在住の財政枢密顧問官ポイト (Peter Christian Wilhelm Beuth, 1781-1853) 宛書簡では、解剖学者と造形芸術家と石膏技術者を各一名ずつフィレンツェに派遣し、一定期間研究滞在させるよう、またムラージュ製作拠点をベルリンに作れないものか、と提案している (MA18/2, S.539)。

またこれとは別に、同様にゲーテを起点とした日独医学交流を調査していくうち<sup>5</sup>、ゲーテが

<sup>2</sup> 拙論 *Der Kadaver und der Moulage. Ein kleiner Beitrag zur plastischen Anatomie der Goethezeit*. In: Goethe-Jahrbuch XLVII (2005). Hrsg. v. Goethe-Gesellschaft in Japan, München (iudicium), S.25-39. および *Die Wiederkehr zum ganzen Körper. Goethe als Schüler Loders und die plastische Anatomie*. In: Universitätsanspruch und partikuläre Wirklichkeiten; Natur- und Geisteswissenschaften im Dialog. Würzburg (Königshausen & Neumann) 2007, S.243-250 など。

<sup>3</sup> マルテンスについては、Schnalke, Thomas: *Diseases in Wax. The History of the Medical Moulage*. Translated by Kathy Spatschek. Quintessence Publishing 1995, S.61f. および Fröder, Rosemarie: *Museum Anatomicum Jenense. Die anatomische Sammlung in Jena und die Rolle Goethes bei ihrer Entstehung*. Jena (Jenzig-Verlag) 2003, S.36f. などが詳しい。ゲーテとの関係では拙論: *Der Kadaver und der Moulage* の特に S.32 以降などを参照されたい。

<sup>4</sup> 1896年にバルデレーベンが行った調査によると、カタログの大半はさまざまな性病の外陰部のムラージュとされているが、この時点ですでにこれら性病のムラージュ標本の存在は確認できず、わずかに脊椎破損や多指症といった先天的奇形のムラージュ標本が6点のみが残っていた。その6点も19世紀末を過ぎた後、おそらく大戦の混乱により、行方がわからなくなってしまったという。Fröder: *Museum Anatomicum Jenense*, S.36. および皮膚科医・上野憲一の随想: 「Goethe とムラージュ」 [『皮膚臨床』42巻1号 (2000) 87~89頁] の89頁などを参照。

<sup>5</sup> 具体的には2010年から3年間の科研費基盤研究 (C) 「近代ドイツと日本の医学交流 産科医・女医の誕生・伝染病予防をめぐる」 (研究課題番号: 22500964) の一連の研究成果をさす。特に拙著『ドクトルたちの奮闘記 ゲーテが導く日独医学交流』(慶應義塾大学出版会) 2012年参照。またドイツにおける大学専属絵画教師からムラージュ技師への変遷については拙論「芸術と科学のはざまへ ゲーテ時代の大学絵画教師からムラージュ技師まで」(日本独文学会『ドイツ文学』146号掲載決定・一部内容的に重複する箇所あり) に言及しているので、あわせて参照されたい。

夢見たドイツ医学へのムラージュ導入に、その死後半世紀を経て、19世紀末のウィーンに留学中だった日本人医学者が関与していたことが判明した。本稿はドイツにムラージュ技法を伝えた日本人留学生・土肥慶蔵を筆頭に、彼が帰国後、ムラージュ技法を伝え、さらに日本のムラージュを最高水準に押し上げた稀代のムラージュ技師・伊藤有および彼の直弟子である宇野一洋、長安周一についての調査報告である。

## Ⅱ. ドイツと日本にムラージュ技法を伝えた土肥慶蔵

皮膚科学史の文献では、パリのサン＝ルイ病院で活躍したバレッタ (Jules Baretta, 1834-1923) が、ムラージュを科学 (医学) 目的で使用した最初の人物とされている<sup>6</sup>。もともとは紙粘土の果物を作る職人だったらしいが、その精巧な細工が皮膚科医の目に留まり、ムラージュ技師への転向と相なった。1889年、職場でもあるサン＝ルイ病院で開かれた第一回皮膚科学梅毒学国際会議に出品したムラージュは、多くの皮膚科医の注目と称賛を浴びた。バレッタのムラージュを前にして、とりわけ迅速な行動をとったのが、ウィーンから参加したカポシ (Moritz Kaposi, 1837-1902: 日本では彼の発見に因む「カポジ肉腫」など濁音の「カポジ」という表記が一般的だが、実際は清音) だった。

当時すでにウィーン大学医学部皮膚科学教室を率いていたカポシは、若い同僚医師で画才にも恵まれていたヘニング (Carl Henning, 1860-1917) をバレッタのもとに派遣する。名匠バレッタにとっては迷惑な話で、どんな著名な医学教授の依頼であろうと、これまで試行錯誤を繰り返しながら編み出した特殊技術をおいそれと伝えるわけにはいかない。バレッタとヘニングの間で激しい攻防が繰り返されたらしいが、対するヘニングもしぶとく、ともかく必要最低限の知識と技は身につけて帰国、1890年以降は医師からムラージュ技師にシフトし、早くも同年ベルリンで開催された医学国際会議のため、12点の一連のムラージュを仕上げている。そして1892年、上司カポシがホスト役になり、ウィーンで第二回皮膚科学梅毒学国際会議が開催されると、会場にヘニング作70点の皮膚ムラージュが陳列された<sup>7</sup>。それからややあって、このヘニングのムラージュに魅了され、瞬時にその有用性を悟ったのが、日本からウィーンに留学していた土肥慶蔵 (1866-1931) だった。

土肥は、日本における近代皮膚科学および泌尿器科学の開拓者と呼ばれるが、本人は当初どちらの分野にも特別な関心を持っていなかったらしい。1890年に東京帝国大学医科大学を卒業、お雇い外国人外科医スクリバの助手として、同大学附属第一医院外科医局に勤務した。大学院ではハンセン病を研究課題に選んだが、1893年7月に大学院を中退して渡独、上司スクリバの紹介状持参で、ハイデルベルク大学の外科学教授ツェルニー (Vincenz Czerny, 1842-1916) に師事した。この頃、土肥は外科もしくは耳鼻咽喉科を専門としたいと考えていたようだ。そこに母校の外科学教授・宇野朗から、「近く皮膚病梅毒学が外科学から分離して新しい講座になるので、そ

<sup>6</sup> 今泉孝:「ムラージュ (ロウ製皮膚病模型) その歴史、現状、保存」[日本臨床皮膚科医会雑誌 J.JOCD Vol.23, No.1(2005)、22~25頁]ほか参照。

<sup>7</sup> Schnalke: *Diseases in Wax*, S.93f. 参照。

の専任教授になるべく転学せよ」との指示が届く<sup>8</sup>。指導教授ツェルニーとも相談の末、土肥は転学を承諾し、1894年、ウィーンの皮膚科学教授カポシのもとに向かった。そこで出会ったのが、医学部内に工房を構えるヘニングのムラージュだったのである。

むろんヘニングもムラージュ技法伝授には難色を示したが、土肥の懇願と上司カポシの口添えもあり、土肥は1896年にブレスラウ（現在のポーランド・ブロッツラフ）に移籍するまでの間、「掻痒性天疱瘡」と「薔薇色秕糠疹」のムラージュ2点を完成させている。ところが梅毒研究のため移籍先ブレスラウ大学のナイサー（Albert Neisser, 1855-1916）もまたムラージュに高い関心を持ち、ムラージュ製作を試みている最中だった。土肥がムラージュ技法をヘニングから学んだことを知ったナイサーは、その技法伝授を要請する。師匠ヘニングに伺いを立て、やむなき場合の承諾を得た土肥は、「余計なことは一切漏らすな」という命令のもと、「皮膚疣状結核」の足型を作ってみせたという。土肥によるムラージュ技法のドイツ導入については、土肥の専属ムラージュ技師となった伊藤有の言葉を引用する。

土肥先生が蠟製標本の製作法を修得したといふことを聞いて、獨逸から先生へ交渉があり、是非その技術を教えて貰いたいといふ依頼状が来たので、帰路獨逸へ廻って製法を伝授された。即ち獨逸の医学会へ蠟製標本といふものを伝へたのは自分であるといふことを、先生は度々云って居られました。<sup>9</sup>

この時、土肥がムラージュ製法を教えたのは、ブレスラウ大学皮膚科学教室の紀要によれば、ベルリーナー（Paul Berliner 生没年不明）およびクレーナー（Alfons Kröner, 1937 没）と推定される<sup>10</sup>。そのうち前者はまもなくベルリンの「シャリテ」大学病院——細菌学者コッホや病理学者ウィルヒョウが集い、森林太郎こと鷗外や北里柴三郎などの留学先として知られる——に移籍した。ただしゲータが1832年に夢見たベルリンをムラージュ製作の拠点とするという構想は、まだこの時点では実現していない。というのも「シャリテ」に皮膚科専門医レッサー（Edmund Lesser, 1852-1918）が着任するのは、ようやく1902年のことだからだ。2010年に刊行された『1910年頃のベルリン・シャリテ大学病院』<sup>11</sup>という歴史的写真集の最後には、大量のムラージュが整然とガラスケースの中に陳列された「ムラージュ標本室 Moulagensammlung」の写真があり、中央に恰幅のよい白衣姿の男性が立っている。この人物こそ背景の夥しい数のムラージュを

<sup>8</sup> このあたりの経緯については、石橋康正：「日本皮膚科学会黎明期の先達たち 村田謙太郎と宇野朗」『日本皮膚科学会雑誌 第100回総会記念特集号 保存版 第111巻第4号（平成13年）、604～608頁』、特に607頁あたりに詳しい。

<sup>9</sup> 伊藤有：「土肥先生と蠟製標本」『『體性』土肥博士追悼号 Vol.17, No.6.(1931)、20～21頁』なお旧字体は一部新字体に改めた。

<sup>10</sup> R. Bialynicki-Birula/E. Baran/ T.Szymczak: *Memories Wrocław. The History of Wrocław Dermatology. Illustrated in Photos*. In: *Dermatologia Kliniczna* 2011, 13(1), S.27-35, hier S.32f. ここでは土肥が伝授した人物は Paul Berliner となっている。なお、Berliner は1890年代半ばまでブレスラウでムラージュ製作に携わった後、ベルリン「シャリテ」に移籍した。Schnalke, S.111 参照。

<sup>11</sup> Hess, Volker: *Die Charité in Berlin. Fotografien um 1910*. Berlin (be.bra verlag) 2010, S.156f.

製作したコルボフ (Fritz Kolbow, 1873-1946) だが、戦火や戦後の混乱などもあり、彼の作品のほとんどが紛失、現在は眼科関連ムラージュのみが「シャリテ」敷地内の医学史博物館に残っている<sup>12</sup>。

### Ⅲ. 日本のムラージュの祖・伊藤有

プレスラウでムラージュ技法を伝えた後、フランス経由で帰国した土肥は、まもなく1898年6月から東京帝国大学教授に就任、皮膚病梅毒学講座を率いることになった。ここで土肥は、まず同医学部所属画家・高野椋一(生没年不明)に懇願され、ムラージュ技法を教え始めた。しかし念願を果たすよりも前に、高野はまもなく病死してしまう。

意欲的な高野を拒むことはしなかったが、土肥自身は早くから皮膚科研究の要となるムラージュ技師候補者について思案していた。その彼が真っ先に思い浮かべたのは、同郷・福井出身の幼なじみ・伊藤有<sup>たもつ</sup>(1864-1934)であった。もともと土肥は越前府中(現在の福井・武生)藩医を歴任した石渡家の生まれで、成人後、叔父の養子となり土肥姓に変わったという経緯がある。対する伊藤も福井・武生の藩士の家系で、こちらは小浜師範に進学した。早くから画才を示し、本人も画家となることを望んだが、親の理解が得られなかった。19歳の時に親を説得して、師範学校を中退して上京、洋画家を目指した<sup>13</sup>。まもなく精緻な描写力を認められて、北海道庁水産課嘱託に就き、魚類の絵を専門に描いていた<sup>14</sup>。水産調査の絵画部での勤務のかたわら、漁網編成機を発明している。この編網機で起業しようと上京したこともあるらしく、この時、帰国直後の土肥に声をかけられた可能性も高い。

伊藤が皮膚科に勤務し始めたのは1898年とされているが、前述したようにすでに高野がムラージュの習作を始めていたため遠慮して、水産課時代と同様、まずは皮膚科の図譜を担当した。およそ2年間に彼が手がけたさまざまな皮膚科疾患の原画は、のちに日本初となる皮膚病図版(石版印刷)にして伊藤・土肥コンビの初仕事『日本皮膚病梅毒図譜』(1903-1910)に使われ、その高い写実性は皮膚科専門医からも「およそ皮膚病変の眞を握むには、我々は目を絵筆程に細かく動かす必要があるのだが、これ等写生図にはカラーフィルムではできない独特の眞実性がある」<sup>15</sup>と絶賛された。

1901年以降、伊藤は皮膚科教室に専用の一室を得て、「東京帝国大学医学部蠟工技術主任」の肩書でムラージュ製作に専念する。土肥は自分の知る限りのムラージュ技法を伊藤に伝授したが、後年この道のエキスパートとなる伊藤にしてみれば、それは大まかな手順を示す初歩的情報

<sup>12</sup> 前掲書 Hess の写真集では、Kolbow の足取りについて、その後「行方不明」となっている。しかしドイツ衛生博物館発行の論文集から、ベルリンの病理学者ウィルヒョウの斡旋により、彼がドレスデンのドイツ衛生博物館に移籍し、ムラージュ製作を続けていたことが判明した。Mühlenberend, Sandora: *Dresdner Moulagen. Eine Stilgeschichte*. In: *Körper in Wachs. Moulagen in Forschung und Restaurierung*. Deutsches Hygiene-Museum Dresden, Dresden (Sandstein) 2010, S.26-39, hier S.30 参照。

<sup>13</sup> 師事したのは「亀井忠」または「亀井至」(亀井至一のことか?)との情報があるが、定かでない。

<sup>14</sup> 当時の仕事のひとつ『北海道水産豫察調査報告』(1892)掲載の挿絵は、水産総合研究センター図書資料デジタルアーカイブで閲覧可能。[http://nrifs.fra.affrc.go.jp/book/D\\_archives/2011DA001.html](http://nrifs.fra.affrc.go.jp/book/D_archives/2011DA001.html)

<sup>15</sup> 復刻版(合本・非売品)土肥慶蔵:『日本皮膚病梅毒図譜』(平成13年)序文3頁参照。

に過ぎなかった。頑固な職人肌の伊藤は試行錯誤を重ね、また幼なじみの気安さで土肥と「喧嘩もし、口論もしながら」<sup>16</sup> 技術の向上に努めた。伊藤が作ったムラージュは医療器具店「風雲堂後藤合資会社」（代表・後藤節蔵）を介して一般にも販売されたが、これを後藤が東京府勸業博覧会（1907年開催）に出品したところ見事、名誉銀牌を獲得した。その受賞理由は、

「多年皮膚病梅毒蠟製模型の製作に考案を凝らし、製品の形態色彩はほとんど真に迫り、かつ全く褪色の虞なきは遥かに欧州製品を凌駕す。學術の進歩に益する所まことに著大なり。其功賞すべし」<sup>17</sup>

とある。また1910年の日英博覧会で名誉大賞を受賞した後に風雲堂が出した広告には、

「蠟製模型は仏国バレッタ氏の創製にして近来各国に於て模製しが其技未だ彼に及ばず。土肥博士欧州遊学の際、填国維納〔ウィーン〕に於て其製法を習得し帰来之を伊藤氏に授け練習せしむ。伊藤氏は更に工夫を重ね終にバレッタ氏を凌駕するの模型を製出するに至れり」。<sup>18</sup>

と掲載されている。1911年にドイツ・ドレスデンで開催された国際衛生学博覧会にも出品しており、日本パピリオン出品カタログ<sup>19</sup>には、土肥・伊藤のコンビで、伝染性皮膚病のムラージュ（梅毒・結核・ハンセン病など）20種類が掲載されている。生前、数々の国際展覧会に出品しては、賞を総なめした伊藤であったが、彼がこの世を去ってからも、その作品は依然大きな威力を発揮した。というのも伊藤の死後20年以上を経た1956年、オレゴン大学皮膚科教授フリッツパトリック（Thomas B. Fritzpatrick）が来日した折、（今は存在しない）東京大学・本郷のムラージュ館<sup>20</sup>を見学し、伊藤のムラージュの素晴らしさに瞠目、それが土肥記念国際皮膚科講座開設（Dohi Memorial Lectureship 1958年～）のきっかけになったからである。

稀代のムラージュ技師と言われるだけあって、伊藤はなかなか強烈な個性の持ち主だった。伊藤の風貌について、伊藤自身や一番弟子の宇野が記した文章<sup>21</sup>をもとに多少の輪郭をなぞって

<sup>16</sup> 伊藤有：「土肥先生と蠟製標本」〔『體性』土肥博士追悼号 Vol.17, No.6.(1931)〕、21頁から引用。なお旧字体は一部新字体に改めた。

<sup>17</sup> 長門谷洋治：「皮膚疾患のムラージュ アンケート調査と史的展望」〔『皮膚病診療』13(3)、1991年、248～254頁〕、252頁から引用。

<sup>18</sup> 同上。句読点は筆者による、また旧漢字の一部は新漢字に直した。

<sup>19</sup> *Katalog der von der Kaiserlich Japan. Regierung ausgestelltten Gegenstände. Internationale Hygiene-Ausstellung Dresden 1911* 参照（北里柴三郎記念室所蔵資料）。

<sup>20</sup> 土肥が寄付した2階建20坪のムラージュ専用保存庫で、現在は解体されている。「大正14年4月に皮膚科泌尿器科病室に隣接してコンクリート二階建をつくり、土肥記念館と称してこの中に蠟細工を陳列して、学生の講義などに使用」した。『東京大学医学部百年史』1967年、東京大学出版会、426頁（執筆者・川村太郎）参照。現存ムラージュは、同大学医学部および総合博物館の管理下にある。当時の写真真は『土肥慶蔵先生生誕百年記念会誌』土肥慶蔵先生生誕百年記念会編1968年巻頭の記念写真集などに残る。

<sup>21</sup> 宇野一洋：「蠟製模型草創史」、〔『九泥會會誌』第29巻（1963）、8～10頁〕、9頁参照。

みると、芸術家肌の職人像が浮かび上がってくる。就任以来、ムラージュ室に籠って作業をしているわけだが、昼も外食はせず、基本はお弁当、時々ムラージュ室で小麦粉を練ってビスケットを焼いて食べていた。粗衣粗食を信条とし、通勤時は皮膚科を支える「黒衣役」を地で行ったのか、いつも黒づくめで、黒の詰襟、黒中折帽、黒の手提げ鞆に黒色、おまけに細い黒縁メガネをかけていた。何か特別の折も黒の背広という徹底ぶりだった。頭髮は撫で上げ、鼻下と顎部に天神髯を蓄えていた。こう書くとエキセントリックな感じがするが、性格は極めて温厚にして純朴、上に媚びへつらうこともなければ、下を侮ることもなく、いつも毅然として芯の通った人だった、と宇野は回想している。また伊藤に直接の指導を受けた後期の弟子で、北海道大学皮膚科学教室で活躍した南條謙雄（「南条」や「義雄」の表記も文献では混在）は、伊藤を「あくまで伝統的なリアリズムを遵奉する画家」と評し、「頑固一徹な御老人で、顎髯を垂らし、能面の翁のような感じ」と形容している。彼の代になっても黒の詰襟がトレードマークで、語り口は「もの凄い吃音」だったと回想している<sup>22</sup>。趣味の分野は、骨董品についてはかなりの目利きで、骨董屋の前を素通りするのは難しかったらしい。

就任から30年経った土肥逝去時（1931）の追悼文で「（東大の）皮膚科だけに、私の作ったものが二千五百、其他の教室に三百程保存されてある」と伊藤は記しているが、その数字から、ムラージュ室に籠りきり、日々黙々と製作に取り組んでいたことが容易に想像できる。その生産性だけでも目を見張るものがあるが、彼は同じ箇所で、「尚ほ全国の大学に只今では蠟製標本の専任製作者が居りますが、何れも一度は私の製作場で技術を習得した人ばかり」<sup>23</sup>と記しているように、ムラージュ技師の後進育成にも力を注いだ。

#### IV. 慶應義塾大学医学部お抱えのムラージュ技師・宇野一洋（生没年不明）

伊藤が後継者育成を意識したのは、1907年に遡る。土肥と伊藤が同郷のよしみであることは前述の通りだが、伊藤もまた故郷・福井に後継となる人材の推薦を求めた<sup>24</sup>。伊藤は候補者の人選を、郷里・武生の高等女学校校長を勤めていた友人・中田豊に依頼する。中田の脳裏に浮かんだのは、家族ぐるみのつき合いがある宇野家の息子、小学生のころから全校でも一番の絵の腕前と評判の高かった一洋青年であった。宇野の記憶によると、中田校長が宇野にムラージュ技術の意義を説き、その後継者となるよう強く勧めたのは1907年2月のこと、しかし宇野自身は、ムラージュより絵の勉強をしたいという気持ちのほうが勝っていた。だがここでせつかくの上京の機会を逃したくない、と思った彼は、完全に納得した形ではないにせよ諾意を示し、同年4月に上京したのだった。初対面の伊藤に、宇野は包み隠さず「絵画を学びたく、美術学校進学を希望していた」という本心を述べた。対する伊藤は中田の報告と齟齬があるのに困惑したものの、宇野にムラージュの学術的意義を力説し、才能は十分あるようだが、一般絵画を学びたいなら美術学校以外にも研究施設がある、と赤坂溜池にあった白馬会洋画研究所への入所を世話した。ここ

<sup>22</sup> 中村秀樹・清水宏：「ムラージュ（ロウ製皮膚病模型）」『北海道医誌』82(4)、2007年、261～266頁、特に262頁を参照。

<sup>23</sup> 伊藤有：「土肥先生と蠟製標本」、『體性』Vol.XVII、No.6、1931年12月、21頁より引用。

<sup>24</sup> 以下の経緯については、宇野一洋：「蠟製模型草創史」、10頁参照。

は黒田清輝や久米桂一郎らを中心とする外光派の作家たちが新設した団体「白馬会」の附属機関で、東京美術学校の卒業生や一般洋画専攻者の研究機関として機能していた。宇野は3か月ほど白馬会絵画研究所に通ったのち、納得したうえでムラージュ技法を習い始めた。

もっとも宇野はムラージュ製作に専念したのではなく、折に触れて洋画家としての仕事も受けていたらしい。というのも信濃町の慶應義塾大学北里記念医学図書館（医学部メディアセンター）第1会議室には、宇野が描いた福澤諭吉と北里柴三郎の肖像画2点が今も架かっているからだ<sup>25</sup>。特に後者・北里の肖像画制作経緯については、宇野が好んで何度かエッセイの題材にしている<sup>26</sup>のだが、モデルになることを嫌った北里に肖像画を依頼される経緯だけでなく、ムラージュ製作中に細菌学者の北島多一に背後から突然「なかなか細かい仕事だね」と声をかけられたとか、肖像画を描くに際して、写真だけではなく実物を一目見たいと頼んだら、梅毒特效薬の開発で知られる秦佐八郎がうまく北里との出会いをアレンジしてくれたとか、初代医局スタッフが複数登場して、開局当時の雰囲気がよく伝わる文章になっている。

北里柴三郎を初代学部長として慶應義塾大学医学部が開局したのが1920年、皮膚科開講は翌1921年のことだった。宇野の初出勤は続く1922（大正11）年10月だった<sup>27</sup>。なお、宇野は昭和3・4年頃から6年近く、駒場と渋谷の中間の住宅地・神泉に住んでいた。当時、渋谷の花街近くでは慶應の皮膚科仲間の医師が開業していて、診察室に特にグロテスクな性病のムラージュを展示し、患者にショックを与えて警告する啓蒙用に使っていたという。1930年代頃の回想だが、1972年の皮膚科同窓会誌にも『モーテル又はモテルの存在』という宇野のエッセイがあり、戦後、梅毒患者が増加していることを憂いて、以下のような提案を行っている。

花柳病 [=性病] のこわさを知らぬ彼女ら [=私娼たち] には、話だけでは実感がもてなくてだめである。そこで皮膚科教室の協力が望ましい。すなわちシヒリス [=梅毒] のムラージュを用いてテレビによる専門医の解説を加え、梅毒の恐怖感をいだけしめる。そして検診治療には特定診療所の外皮膚科一般開業医の参加をも求め、彼女らの自由意思による希望に応ずるといふ仕組としたらどうだろうか。<sup>28</sup>

実際ムラージュが興隆した背景には、梅毒感染の問題があった。医学的にも社会的にも梅毒の恐怖を伝える啓蒙目的で、欧州では移動ムラージュ展が行われていたという<sup>29</sup>。宇野の提案はこの

<sup>25</sup> 慶應義塾大学医学部貴重品台帳No.212およびNo.229に宇野の描いた肖像画として記載あり。『慶應義塾大学医学部新聞』第500号（1993年）の安田健次郎による記事「信濃町の北里柴三郎先生」（信濃町物語り その41）にも言及があるが、ここに記されている「宇野画伯は昭和6年6月13日逝去」とあるのは誤りで、これは宇野ではなく、肖像画のモデルである北里逝去の日付である。

<sup>26</sup> 宇野一洋：「医傑北里先生の一面」〔慶應義塾大学皮膚泌尿器科学教室同窓会誌『九泥会会誌』No.6.(1976年)、14～15頁〕

<sup>27</sup> 宇野一洋：「開局時の雑音」〔同上『九泥会会誌』第28巻（1962）10頁〕および「横山先生を憶う」〔同じく第26巻（1960）28～30頁〕など。

<sup>28</sup> 宇野一洋：「モーテル又はモテルの存在」〔『九泥会会誌』1972年No.2、8～9頁〕、9頁より引用。

<sup>29</sup> 中村秀樹・清水宏：「ムラージュ（ロウ製皮膚病模型）」『北海道医誌』82(4)、2007年、261～266頁、特に261頁以降参照。



意味で正統かつ正論でもあるが、おそらく現在ムラージュを日本国内の博物館等で展示する際、見学者に対する配慮と警告が必要とされるのと同じ理由で——つまりムラージュは純然たる医学標本であり、その背後には患者の苦痛や犠牲そして協力があるという事実を予備知識に持たないと、単なるグロテスクでショッキングな見世物と化してしまうという問題から——実現しなかった。

それと前後して、宇野は皮膚科学教室からムラージュの補修を委託されている（1960年代後半と推定）。当時教室には「五百個程のムラージュ」が保管されていたが、この時すでに「戦災による破損、永年放置の汚れ、よくも、こんなにひどくなったもんだと驚いた程、ものすごく中には何が何んだか全く判らんだ程、真っ黒になったものもあった」<sup>30</sup>という。

それでも一応洗って見たら、病変と色調がはっきり現われて四十年前の多数の患者と再会したかのような錯覚を感じ、どれを見ても懐旧の念止まぬ、思出のものばかりである。

綺麗に復元しましたから皆さん何かの折御供覧願いたいものです。<sup>31</sup>

と、宇野は記している。日本皮膚科学会百周年式典には、この慶應医学部所蔵ムラージュのごく一部が出展されたが、通常は非公開の場所に集中保管されている。2012年夏に筆者は皮膚科学教室より特別に閲覧を許可されたが、目分量概算で大小含め300ほどの皮膚病関連のムラージュが現存していた。なお同教室では、2012年から少人数クラスで典型的な症例のムラージュを教材として使う試みを始めているが、肝心のメンテナンス、宇野のようにムラージュを「洗って」復元できる技術者は、日本にはもう居ない。

## V. 伊藤の後継者・長安周一 ムラージュから復顔法の専門家へ

伊藤の訃報により、東京大学医学部皮膚科および泌尿器科は、宇野に後任を依頼したが、宇野は慶應から東大への移籍を拒否した。かわりに宇野が適任者として推薦したムラージュ技師が、当時日本歯科大学に勤務していた長安周一（1909-1990）であった。長安は1924・1925年頃（大正13・14年頃）から指導を受けていた宇野の弟子だった。

長安は——以下、本人の申告による<sup>32</sup>——京華中学校在学中の2・3年生頃から油彩画を始めた。中学の同級生のひとりが、のちの映画監督・黒澤明だった。中学卒業後は、小林萬吾（1870-1947）の私塾・同舟舎洋画研究所に入所し、油彩の研鑽を積んだ。この長安の画才は、血筋なのかもしれない。彼の曾祖父は播州藩赤穂出身の幕末に活躍した画家・長安周得（本名・義信；1788-1867）にあたる。大坂の佐野龍雲に師事し、40歳にして朝廷から「法橋」<sup>33</sup>の位階を授かった腕前だった。茶道家の祖父を挟み、実父・長安雅山（本名・幸之助1875-1963）は日本画家

<sup>30</sup> 宇野一洋：「開局時の雑音」、10頁より引用。

<sup>31</sup> 同上

<sup>32</sup> 神山恵三：「他人の顔を復元する法 今月の人・長安周一」連載「孤独なライフワーク」第12回『自然』第21巻10号（1966年10月）、80～85頁。

<sup>33</sup> 長安周一のインタビュー記事では「法元」となっているが、正しくは「法橋」。

を志し、上京して橋本雅邦（1835-1908）に師事した。この父・長安雅山が、慶應義塾大学医学部泌尿器科のスタッフたちと親交があったらしい。宇野は仲介した人物として泌尿器科スタッフの宮沢という名を挙げているが<sup>34</sup>、長安の記憶では、初代皮膚科教授の笹川正雄が自宅を訪れ、「ムラージュをやってみないか」と勧誘したのがきっかけだという。それから約10年、長安は慶應でムラージュ技法の修業を続けることになる。以下、長安の当時を回想したインタビューからの引用である。

「ムラージュのやり方の原理は簡単です。水彩絵の具で紙に10分か15分以内に、問題の皮膚の部位をスケッチしてしまうのです。

そして印像剤で皮膚のネガティブな型をとり、この型にロウ類を入れて、ポジ型を作り、水彩絵の具でスケッチしておいた色彩を、凸型の皮膚模型に転写していくのです。慶應には、この道の達人である宇野一洋とか、伊藤有といった人がいて、手を取って教えてくれました」<sup>35</sup>

約10年の修業の後、日本歯科大学に職を得ていた長安は、伊藤の死去により、東京大学の皮膚科教授・遠山郁三の指名を受け、1936年（昭和11年）前後に東京大学医学部に嘱託として移籍する。当時は教材として典型的な症例はもとより、珍しい症例を含め、一か月に平均10個のムラージュを作っていたという。「仮性半陰陽、象皮病、あるいは、体中に鱗の生えているような魚鱗症、また、ワニの肌ようになる皮膚角化症、額から角が生えてくる病気など」<sup>36</sup>、教授の診療が終わるとすぐムラージュ製作の指示がとんだ。外陰部などの型取りもあったから、患者には一定時間の身体的忍従を強いただけでなく、羞恥心などの心理的苦痛にも耐えてもらわなければならなかった。とにかく患者に必要な以上の苦痛を与えないよう、最速かつ精確に作業を進めなければならず、「どこまでいっても、これで完成という境地にはなれませんでした」と長安は述懐している。

まもなく皮膚科だけでなく法医学教室との兼務になった彼は、法医学の作業室では「ずい分、むごたらしい、顔をそむけたくくなるような」損傷部分をムラージュで記録する作業を続けた。その高度な職人芸を、長安がわかりやすく解説しているので、引用する。

「いまは、アルギン酸を主成分とするアルジックスをゴムのボールに入れ、これに季節に応じて量を加減して石膏を入れ、水を加えてペースト状にし、これをムラージュをとろうとする部位の上に塗ります。しばらくすると、かたいプリン状に固まりますので、これをはがしますと凹型がとれます。

それにパラフィン、セレシン、白ろう、蜜ろう、亜鉛華などを、季節や皮膚の色に応じて、その分量を微妙に加減して混ぜ、それらを火で溶かして、凹型に流し込みます。皮膚の色は表面色でなく、透明色なので、ただこの凸型に着色すればいいというものではなく、やはり基

<sup>34</sup> 宇野一洋：「蠟製模型草創史」、10頁参照。

<sup>35</sup> 神山恵三：「他人の顔を復元する法 今月の人・長安周一」82頁参照。

<sup>36</sup> 同上、83頁参照。

体の色あいが問題になるわけです。それに型にならない前の色と、型にできあがった場合とでは、まったくといっていいほど違いますので、できあがりを入れながら、混ぜ合わせなければなりません<sup>37</sup>。

作業当日の湿度や気温なども念頭に入れて材料の混合比率を計算していく型取り作業の複雑さもさることながら、特に皮膚病変はそのものが刻々と変化する。患者とはまさに「一期一会」の関係——たとえば皮膚結核末期の症例ムラージュなどを観ると、専門知識がなくとも該当患者の余命の短さを連想させられる——なので、最初の10分余りのスケッチで色合いや患部の様子すべてを脳裏に焼きつける記憶力も要求される。長安は1961（昭和36）年に退官するまでの25年間で4000個近いムラージュを製作したという。

日本国内では、1960年代になるとムラージュは製作されなくなり、ムラージュ技師も姿を消した。最大の理由は、必要に応じて患部を拡大（引き伸ばし）できるカラー写真やスライドの登場が筆頭に挙げられるが、他にも短時間で撮影できる写真とは違って、ムラージュは患者側の格別の協力と我慢を強いること、またコストの面では、ベテラン技術者の育成と確保が必要なおうえ、材料が加工しやすい蠟であるだけに傷みやすく、保管方法に注意が必要で、しかも場所をとる——何しろ数百、数千個単位のムラージュを整頓・管理する空間を考えなければならない——などの諸事情もあった。

人知れず引退し、消息を絶ったムラージュ技師も多いなか、長安は華麗な転身を遂げる。かつて法医学教室で仕事をともにした教授で科学警察研究所長に就任した古畑種基の招聘により、1961（昭和36）年6月に科学警察研究所の主任研究官として法医学研究室に移籍した。そこで長安は膨大なムラージュ製作の経験を活かし、頭蓋骨に肉づけして生前の顔を蘇らせる「復顔（カービング）」の特殊技術者として活躍した<sup>38</sup>。身元不明の白骨死体からの犯人探しが本業だったが<sup>39</sup>、その腕を買われて、中尊寺の藤原氏第三代秀衡公のミイラから生体復元を行うなど、民俗考古学の領域にも携わった。もっとも復顔法の専門技術者も、1966年のインタビューの時点で、長安が日本国内では自分ひとり、「世界でもイギリスに5、6名、アメリカで2、3名」と答え、地味な仕事で、何人も専門家は必要ないが、息の長い人に技術を継承者して欲しい、と希望している。長安は科学捜査の草分け的存在になったが、趣味の分野でも文才・画才を発揮し、退官後は映画「顔のない女」の製作にも参加していたという<sup>40</sup>。

## VI. 結びにかえて 今後の課題

ゲーテと医学をきっかけに、また近代日独医学交流という観点からも、上記の3名のムラージュ

<sup>37</sup> 神山恵三：「他人の顔を復元する法 今月の人・長安周一」83頁参照。

<sup>38</sup> ちなみに科学警察研究所での古畑・長安らに直接取材した島田一男は、彼らをモデルにした長編推理小説『科学捜査官』1973（光文社 カップノベルス）を書き下ろしている。

<sup>39</sup> 文才もあった長安が、自らの仕事を語ったエッセイ『骨は生きている 犯罪捜査に大きな役割を果たす復顔法をめぐるエピソード』には、探偵小説のような面白さがある。『日本及び日本人』1517号、1973年5月号（金尾文淵堂）、181～187頁所収。

<sup>40</sup> 小野友道：「日本のムラージュ」、653頁参照。

ムラージュ技師（伊藤・宇野・長安）の系譜を調査しているうちに、次々と彼ら以外の名匠たちの存在が浮かび上がってきた。たとえば北海道大学皮膚科学講座で活躍し、東大退職時に伊藤が後継に考えたというムラージュ技師にして日展系洋画団体「創元会」の常連でもあった南條議雄、木下奎太郎こと皮膚科医・太田正雄が惚れ込んだムラージュ技師・長谷川兼太郎（名古屋大学および当時・奉天の満州医科大学を中心に活動）、またドイツでも活躍し、北里研究所における伝染病・寄生虫研究を支え続けた沼田仁吉などが挙げられる。彼らの晩年については、医局のOB・OGを中心にまだかろうじて——ただしすでに間接的な情報が多くなっているが——聞き取り調査を含む資料収集が可能である。国内外の皮膚科学分野でも医学史のかつ技術史的に貴重なムラージュを保存・継承する意義を強く意識し始めており、同様の観点から、引き続き日本におけるムラージュ技師の系譜を調査していく必要があるだろう。また近代日独医学交流という点では、土肥慶蔵のムラージュ導入に限らず、20世紀前半にドイツで開催された衛生博覧会への参加・出品など、ベルリンやドレスデンをはじめ、複数のドイツ都市との関連性が判明しており、表舞台の研究者交流だけでなく、これまで研究対象とされてこなかった裏方技術者の視線からも、近代国際学術交流の重層的な在り方を明らかにしていきたい。

#### 謝辞

本論執筆にあたっては、多くの方々に貴重な歴史的資料の提供や閲覧をはじめ、さまざまなご協力・ご理解を賜りました。ここに改めて心からお礼を申し上げますとともに、特にお世話になった方のお名前を挙げさせていただきます（\*以下、順不同）：北里柴三郎記念室 森孝之先生・大久保美穂子様／北里大学医学部 檀原宏文先生／慶應義塾大学医学部皮膚科教室 西川武二先生・海老原全先生／慶應義塾大学日吉メディアセンター 柴田由紀子様／同信濃町メディアセンター 西條智架様／東京大学医学部標本室 金子仁久先生／福井市立郷土歴史博物館 角鹿尚計様

なお、本論は科研費・基盤研究C「近代ドイツと日本の医学交流 産科医・女医の誕生・伝染病予防をめぐって」（研究課題番号：22500964）の2012年度の成果のひとつです。